

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 31 回  
第 6 章 鳥越信先生  
その 3 児童文学研究のデザイン (続)

1979 (昭和 54) 年 11 月、鳥越信先生 (1929~2013 年) が監修した児童文学史展のお手伝いで、鳥越先生といっしょに沖縄に行った。私は、1 年浪人して入学した大学院の 1 年次で、24 歳だった。

#### 「四領域」の構想

このことは、別のところで何回か書いているのだが (注 1)、前回までのつづきで、あらためて書くことにする。

1976 (昭和 51) 年に刊行された日本児童文学学会編『日本児童文学概論』(東京書籍) の第五章「児童文学の研究と批評」の第一節「研究の領域と方法」は、鳥越信先生が執筆している。ここでは、「研究の四領域」ということがいわれている。四領域とは、「文芸学」「作家・作品論」「文学史」「文献・書誌学」だ。最後の「文献・書誌学」については、「この領域が扱う具体的な問題は、年表・年譜・著作目録・研究文献目録・雑誌の総目次等であって、いわば三つの研究領域を支える基礎的な分野と言える。したがってここでは事実そのものを押さえることが最も重要であって、」と述べている。そして、ほかの三領域にくらべて、「文献・書誌学」は、「ほとんど未開拓」ともいう。

例えば、小川未明は俗に一千編の童話を書いたと言われているが、その初出発表紙・誌が判明しているのは、半分の五百にも満たない。これは、児童文学関係の雑誌・単行本等が、消耗品である性格からもきているが、やはり研究の基礎的分野である文献・書誌学への軽視が大きいとも考えられるだけに、若い人たちがこの領域に関心をもってくれることが望まれる。

このように書いた鳥越先生が『日本児童文学史年表』1・2 (明治書院 1975 年、77 年) をはじめ、「文献・書誌学」にかかわる、いくつもの仕事をして、それが、やがて大阪国際児童文学館の設立にもつながったことは、すでに書いた。

鳥越先生の構想した児童文学研究は、「文献・書誌学」という「事実」を明らかにする領域を基礎として、「作家」や「作品」や「文学史」という実体をあつかうものだった。「文芸学」については、「児童文学とは何か、という永遠的な命題」としている。

日本児童文学学会編の『日本児童文学概論』は、『世界児童文学概論』『児童文学研究必携』と同じ出版社から同時に刊行され、これらは三部作のようになっている。『児童文学研究必携』のⅡ章は、「児童文学研究の四領域」となっていて、この時期、「四領域」構想が児童文学研究において力をもっていたことがわかる。また、この「四領域」は、学問分野としてたいへんに若かった児童文学研究が学問としての骨格をそなえようとして、そのころまでの日本近代文学の研究のありかたを踏まえて考えられたものとも思えてくる。

## その後の児童文学研究が向かおうとしたところ

鳥越先生が執筆した「研究の領域と方法」を読み直すと、その後の児童文学研究の向かおうとしたところが、「四領域」構想とは根本的にちがうことに気づく。「四領域」構想が、実体としての児童文学を研究対象にしようとしたのに対し、ある時期から、問題として意識されるようになったのは、児童文学という考えかた(概念)そのものである。児童文学は、近代になって、「子ども」が大人とちがった価値をおびた存在として発見されたとき、その子どもに読み物をとどけようとして生まれたものだろう。1980(昭和55)年に、フィリップ・アリエスの『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』(杉山光信他訳、みすず書房、原著は1960年)が刊行され、柄谷行人の評論「児童の発見」(『群像』1月、『日本近代文学の起源』講談社1980年所収)が発表されて、近代における「子ども」の発見が語られたとき、児童文学研究のありかたも考え直されるようになったということだろうか。

やはり、日本児童文学学会が編集した叢書『研究＝日本の児童文学』全5巻(東京書籍)が刊行されたのは、1995(平成7)年から2003(平成15)年にかけてだった。この研究叢書には、事実や実体としての児童文学の研究ではなくて、児童文学という考えかたの研究へ向かうモチーフが見てとれる。それは、各巻のタイトルを書き出してみれば、わかるだろう。

- 1 『近代以前の児童文学』
- 2 『児童文学の思想史・社会史』
- 3 『日本児童文学史を問い直す—表現史の視点から』
- 4 『現代児童文学の可能性』
- 5 『メディアと児童文学』

『研究＝日本の児童文学』は、思想史、社会史、表現史やメディアという観点から児童文学を考え直そうとしているし、「近代以前」の児童文学ということを想定して、既存の児童文学の枠組みの外へ出ようと試みている。

2002年10月の日本児童文学学会創立40周年記念研究大会で行われた「打ちつづく記念シンポジウム 児童文学研究、そして、その先へ」は、『研究＝日本の児童文学』の姿勢をさらに発展させたものになった。やや短い時間のシンポジウムを3回重ね、最後に総合討論を行うかたちをとったのだが、三つのシンポジウムのタイトルは、つぎのとおり。

- 1 「児童文学研究と子ども性、女性性」
- 2 「近代文学としての児童文学、教育としての児童文学」
- 3 「メディアとしての児童文学、メディアのなかの児童文学」

この「打ちつづく記念シンポジウム」は、複数の中心(テーマ)をもつことによって、ありきたりの児童文学研究を解体し、児童文学研究が同時にジェンダー論や近現代文学研究や国語教育研究やメディア論などなどでもあるような場所をつくったと思う。児童文学が現代の諸問題を語る素材の一つになりうることや、児童文学を素材に語ることが、いろいろな場所で現代の諸問題を考えている人たちとつ

ながっていけることも示したのではないか。2007（平成 19）年には、シンポジウムの報告者たちが当日の内容を踏まえて作った共著『児童文学研究、そして、その先へ』上・下（宮川健郎・横川寿美子編、久山社）も刊行された。

### 児童文学研究の理想

2014 年に古田足日先生が亡くなった直後だったと思う。大学の講義で古田先生の話をしたら、学生たちのあいだから、『おいしいのぼうけん』はその古田の作品だったのかとか、『おいしいのぼうけん』と『大きい 1 年生と小さな 2 年生』は古田という同じ作者の作品だったのかというような声が多く聞かれた。学生たちのこうした声に接することは時折ある。私の観察によれば、たぶん 10 歳くらいまでの子どもたちは、熱中して読んだ本だとしても、作者のことを意識しない。だから、学生たちは、古田足日のことをよく知らなかったのである。

子どもの読書のありかたに何らかのかたちで寄りそうのが児童文学研究の理想だとすると、鳥越先生が「児童文学研究の四領域」の一つとしてあげた「作家・作品論」は、あまり意味がないことになる。子どもたちは、「作家」と照らし合わせて「作品」を読んだりしない。子どもたちの前にあるのは「テキスト」なのである。

児童文学を「テキスト」と考えたとき、子ども読者論の領域が開かれるはずだ。前回、私自身の試みにもふれたけれど、私は、児童文学研究において読者論に目立った成果がないことを何度も反省し、なげいてもきた（宮川健郎「児童文学理論の歩みと未来」、日本児童文学学会編『児童文学研究の現代史』小峰書店 2004 年所収など参照）。ここでは、子ども読者に接近する試みとして、三宅興子他編『大正期の絵本・絵雑誌の研究——少年のコレクションを通して』（翰林書房 2009 年）をあげておこう。札幌市図書館所蔵の「池田コレクション」、1910 年生まれの少年が愛読した絵本・絵雑誌など 281 冊の研究である。コレクションの内容の調査・研究が中心だが、ここから、大正期の子ども読者の像を描き出すことができないものだろうか。

### 新しい「文献・書誌学」

2022（令和 4）年 11 月に宮城教育大学で開催された日本児童文学学会研究大会のシンポジウムのテーマは、「現代児童文学をいかに歴史化するか—資料の保存・活用の方策を考える—」だった。その記録が同学会の紀要『児童文学研究』第 55 号（2023 年 3 月）に掲載されている。シンポジウムのコーディネーターであり、司会をつとめた大木葉子さんが、その意図を述べている。

現代児童文学の開始から六〇年あまりを経た現在、急がれるのは、アーカイブ化も含め現代児童文学資料をいかに適切に保存・活用し、次世代へと伝えていくかということである。時代を切り開いた作家・評論家・研究者が近年相次いで故人となり世代交代が進む現在、様々な方法で資料の保存・伝承の方法が模索されている。（中略）現代児童文学出発期からの歴史的遺産をどのように次世代へと継承し、活用していくか、このことは私たちにとって喫緊の課題と言えるだろう。またこの問題は、単なる資料整理の方策といった問題にとどまらず、現代児童文学をいかに歴史化するかという現代児童文学史構築のあり方とも深い関わりをもつと考えられる。

登壇したパネリストは、古田足日が遺した資料を整理、研究する「古田足日研究プロジェクト」の西山利佳さん、日本児童文学者協会創立75周年記念資料集『戦後児童文学の証言』（2022年）を刊行した藤田のぼるさん、資料を博搜して『転向者・小川未明——「日本児童文学の父」の影』（北海道大学出版会2020年）をまとめた増井真琴さん、現役作家の研究会である「あまんきみこ研究会」の宮田航平さんの4人だった。私も、シンポジウムをフロアで聞いていたひとりだが、児童文学という考えかた（概念）の研究をくぐりぬけたあとの現代児童文学（史）研究を基礎づける新しい「文献・書誌学」のはじまりを予感させるものだった。

鳥越信先生は、先の「研究の領域と方法」という文章で「小川未明は俗に一千編の童話を書いたと言われている」としていたけれど、少し前から、未明童話は約1200編と考えられている。作品を数え足したのは、小埜裕二さんだ。小埜さんが編集した『小川未明新収童話集』全6巻（日外アソシエーツ2014年）には、『定本小川未明童話全集』全16巻（講談社1976～78年）に未収録の374編と新しく発見された80編が収められている。ようやく、その全貌が明らかになってきた未明童話を読み直す季節がやってきたらしい。それは、未明批判をとおして成立した現代児童文学のありかたを考え直すことでもあるはずだ。鳥越先生のいった「文献・書誌学」もまた、更新されている。（上記のシンポジウムで、増井真琴さんも、小埜さんの仕事にふれている。）。

### 編集者・鳥越信先生

鳥越先生は、大学を卒業して、まず、岩波書店の児童書編集部につとめた。編集者として最初に手がけたのは、バージニア・リー・バートンの『ちいさいおうち』（石井桃子訳、1954年）だったという。岩波には4年ほど在籍して退社したが、その後も、鳥越先生は、エディターシップを発揮して、さまざまな仕事をしたのではないかと。先生は、ずっと「編集者」だったとはいえないか。編著や全集の編集の仕事なども、ずいぶん多い。（注2）

日本児童文学者協会の機関誌『日本児童文学』の編集委員や編集長も、しばしばつとめた。鳥越先生が編集した号でもっとも印象に残っているのは、「タブーの崩壊—性・自殺・家出・離婚—」を特集した1978（昭和53）年5月号だ。現代児童文学がそれまで「タブー」として子どもたちから遠ざけていたテーマを、人間にとって本質的なものとして語りはじめたことを（これは世界的な傾向でもあったが）、いち早くとらえた特集だった。鳥越先生は、編集後記にこう記している。

この号は、児童文学における「タブーの崩壊」を特集してみた。予告では「子どもの現実と児童文学」としていたのだが、子どもをとりまくさまざまな現象の中から、とくに最近の話題になったり、大きな社会問題になったりしたことを具体的にしばっていくと、結局、家出、性、離婚、自殺などが残った。考えてみると、これらは全て児童文学の世界では従来タブーとされてきたことがらなので、特集タイトルも一層はつきりするようにかえたのである。

鳥越先生は、かつて、小川未明は人が死ぬ、草木が枯れる、町がほろびるなどネガティブな主題を書いたとして批判した（「解説」『新選日本児童文学』1、小峰書

店 1959 年所収)。1970 年代後半になって現れた現代児童文学の新しい傾向に対しても、「ネガティブ」だと考えて批判的だったと思われる。それでも、それを「タブーの崩壊」という特集タイトルで見事に表現したのだ。編集者・鳥越信先生の面目躍如である。

『日本児童文学』は、1991（平成3）年11月号で「「タブーの崩壊」以後」という特集も組んだ（このときの編集長は浜野卓也先生）。「タブーの崩壊」ということばは、現代児童文学の転換期を表す用語としてすっかり定着している。それが、だれが名づけたものなのか知らない若い研究者もいるから、もう年寄りになった私は、鳥越先生のことを語っているのだ。

（第6章「鳥越信先生」おわり）

#### （注）

- 1、宮川健郎・横川寿美子編『児童文学研究、そして、その先へ』上・下（久山社 2007 年）のまえがき「私たちは、どこにいるのか、どこへ行こうとしているのか」（宮川執筆）、宮川健郎「児童文学」（日本近代文学学会編『ハンドブック日本近代文学研究の方法』ひつじ書房 2016 年所収）など。今回のこの文章の内容がこれらと重複する部分があることをおことわりします。
- 2、大阪国際児童文学振興財団作成「鳥越信先生 主要著作目録」（フォーラム報告集『児童文学とは何かを問い続けて 児童文学者 鳥越信の仕事を顧みる』大阪国際児童文学振興財団 2015 年）参照。

## 第6章「鳥越信先生」関連年表

- 1929（昭和4）年 12月4日 兵庫県神戸市で生まれる。
- 1950（昭和25）年 旧制姫路高校をへて、早稲田大学第一文学部国語国文学科に編入学。
- 1953（昭和28）年 9月、早大童話会機関誌『童苑』第19号を『少年文学』と改題して発行。巻頭に「少年文学」の旗の下に！（少年文学宣言）をかかげる。草案を書き、古田足日、鈴木実らと討論を重ねて発表。9月、早稲田大学卒業。12月、岩波書店入社（57年12月、退社）。
- 1954（昭和29）年 6月、古田、神宮輝夫、山中恒らと「小さい仲間の会」を結成、同人雑誌『小さい仲間』創刊。
- 1962（昭和37）年 5月、日本近代文学館設立発起人。10月、日本児童文学学会常任理事（93年10月まで）。
- 1963（昭和38）年 4月、早稲田大学教育学部専任講師。のち、助教授、教授を歴任。8月、『日本児童文学案内』（理論社）。
- 1975（昭和50）年 9月、『日本児童文学史年表』1（明治書院、2は77年8月刊行）。
- 1978（昭和53）年 5月、『日本児童文学』の特集「タブーの崩壊—性・自殺・家出・離婚—」を企画編集。
- 1979（昭和54）年 5月、児童文学関連資料約12万点（鳥越コレクション）を大阪府に寄贈。大阪府で日本初の児童書専門資料館設立プロジェクト発足。11月、「児童文学のあゆみ展」（監修、沖縄・デパートリウボウ）。
- 1980（昭和55）年 3月、『日本児童文学』別冊『資料／戦後児童文学論集』全3巻刊行開始。6月、『校定新美南吉全集』全12巻・別巻2（大日本図書）刊行開始。7月、財団法人大阪国際児童文学館設立。理事に就任。
- 1983（昭和58）年 3月、早稲田大学退職。5月、大阪国際児童文学館総括専門員（92年7月、退職）。
- 1884（昭和59）年 5月、大阪府立国際児童文学館開館。
- 1993（平成5）年 10月、大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』全3巻（大日本図書）。第4回国際グリム賞受賞。
- 1994（平成6）年 4月、聖和大学大学院教育学研究科教授（2005年3月、退職）
- 2001（平成13）年 4月、『はじめて学ぶ日本児童文学史』（ミネルヴァ書房）。
- 2010（平成22）年 4月、財団法人大阪国際児童文学館理事を退任、嘱託となる。
- 2013（平成25）年 2月14日、逝去。83歳。

\*大阪国際児童文学振興財団作成「鳥越信先生年譜」（フォーラム報告集『児童文学とは何かを問い続けて 児童文学者 鳥越信の仕事に顧みる』前掲）を参考にした。